

健康文化

超音波検査と若い女性をめぐって

島本 佳寿広

「僕は男であるからいいものの、女の人にするのは許しがたいことである。あんなローションをつけられて検査される彼女を想像すると、その医者殺したくなる思いだ。女の人を裸を検査だといって見るのは犯罪級だ。どうかして下さい。」

人は目先のことにとらわれたり、自分自身の体験に縛られ過ぎるが故にしばしば愚かな選択をする。しかし、専門家の判断が常に正しいとは限らず、大衆の感覚の方が真実をついていることもある。学生も講義中には何も意見や質問を出さないものの、いざレポートを提出させると中には予想外にしっかりした考えを持っている学生もいてこちらが勉強になることもある。

冒頭に引用した例は「超音波検査でわかること、将来に期待すること」という課題で工学部の学生が書いたレポートである。彼の主張は美容師に髪の毛に触れることなくカットを要求するようなもので全く論外だともいえるが、検査を受ける側がどう感じているのかという重要な問題を提起している。確かに裸を日常的に見なければ診療がなりたたない立場である医者感覚は、世間の一般常識とはズレている面もある。解剖だってホラー映画になりかねないし、心臓移植もカルバリズム丸出しの悪魔の儀式にもなろう。中世ヨーロッパならば間違いなく宗教裁判で火刑に処せられるようなことでさえも、今や立派な医療として正当化されている。猿の首をすげ替える“医学的実験”すらやっている世の中だ。従来の倫理観は既に崩壊しており、かつ本質を隠蔽することに欠かない文化に棲息している我々にとって、いったい何が“普通の感覚”といえるのか、わからなくなる。“価値観の多様化”という言葉は人間の愚行を正当化する方便に過ぎないが、人類は何をやっても許されるのではない、ということはいき起こす必要がある。

さて、彼の話、超音波検査で女性を脱がせることは正当化されるか、という問題。彼自身、過去に何度か心エコーを受けた経験があり、超音波検査の有用性は認めているが、「これからのエコーに望むことは体に触れることなく検査をすることである。僕は少しもふざけていません。自分の最愛の人が知らない医

者に心エコーなんて発狂しそうです。」と真剣に訴えている。もし自分の恋人がこんな目にあったら相手を殺してやりたい、ということだから、彼の心エコーをした人がよほど変質者に見えたのだろうか。文脈から察すれば、暗い部屋で裸にされたうえに体を撫で回される、若い女性にとって危険極まりない検査ということになる。疑いだせばきりが無いが、いちいち変態よばわりされても困る。勿論、超音波検査で「裸にする」のは必要最低限にとどめるように配慮すべきだが、彼の意見は余りにも一方的な邪推ではないか。しかし、自分で何度か検査を体験した上での主張であり、ここで超音波検査における“不快感”をチェックしてみることにする。

病院の中では診察室、検査室と脱がなければならない機会が多い。「病院では必要に応じて脱がなければ仕方ない」ということが暗黙の了解事項になっているわけで、例えば皮膚科ではどんなに恥ずかしい部位であっても、とにかく皮疹を見てもらわないことには治療は始まらないし、胸部単純X線写真の撮影や心電図でも上半身裸になる。医療従事者は「患者さんが不快感を持たないように心がける」のが鉄則というものの、やはり必要に応じて脱いでもらわざるをえない。もちろん脱ぐことの抵抗感は一々人それぞれだ。若い女性がオジン化している世の中でもあり、羞恥心は必ずしも年齢に相関しない。医療従事者にしても、いつも自分が他人を裸にしている時には何とも思わなくても、いざ患者さんの立場になってみれば恥ずかしい思いをすることだってあろう。

では超音波検査はどうか。超音波検査はなによりも非侵襲性が最大の売り物である。しかも、保険点数は他の画像検査に比較して格安。最近のエコーガイドの *intervention* の普及や本年発売予定の超音波用造影剤の登場などもあって次第に侵襲性が増す流れにあるのは事実だが、一般常識からみて犯罪行為とか、医者を殺したくなるとか、批判されるような検査なのだろうか。もともと、何をもって危険な行為とするのか、患者さん自身が判断基準を決めたわけではない。「無害で安全な検査です」といっても、その意味するところは受け手によって異なるだろう。医者側のひとりよがりだと反論される余地はある。

彼の言うような体に触れない超音波がないかということ、実は非接触で行える水浸式装置がある。これは乳腺などの体表臓器専用として普及したもので、今でも乳癌検診で活躍している。しかし、この場合でも皮膚面を露出させると同時に何らかの介在物質（一般には市販されている超音波用ゼリーを使う）をつける必要がある。大部分の検査は探触子を直接皮膚面に当ててスキャンしており、(1) 脱衣、(2) ゼリーの塗布、(3) 探触子をあてスキャンする、という検査手順と(4) 部屋の環境が患者さんに不快感を与える要因となりえる。

まず、脱衣だが、衣服をゼリーで汚さないために検査する範囲よりは少し広めに服を脱いでもらおう。彼の問題とする心エコーでは当然胸を出さなければ検査不能だし、上腹部でも肝臓を充分みるためには肋間走査が必要なので上半身裸の方がずっとやりやすい。

だが、患者さんには、超音波検査がどういう手順で行われるものなのか、検査に臨むまで全く理解していない人もいる。超音波のような簡単な検査はいちいち患者さんに説明しなくてもわかっているはずと医者の方が勝手に思っているだけである。そのため、検査の時になってスムーズにいかないことしばしば。着脱に非常に時間のかかる和服に身を固めて来るツワモノもいるし、乳癌の検査なのに服を着たままで横になる人すらいる。そういう人に脱いで下さいと言うと、エッ！脱がないと検査できないんですか？、といやな顔をされる。さすがに、脱ぐなら検査しません、と言って帰った人はいないけれど。

頸部の場合はふつう脱がなくても検査可能だが、丸首ではしにくい。わざわざそういうものを着てくる人に限って、脱ぐのはいやだからこのままで検査してくれ、と言う。検査に邪魔なネックレスをつけたままで横になる人もいる。自分で取れないから外すの手伝って、と言われて、何でこんなモノをわざわざ検査の時につけてくるんだ！、と叫びたくなるのは私だけか。

次いで上腹部検査の場合。これも特に若い女性が要注意。お腹を出して寝て下さい、という指示ではとても検査にならないほど僅かしかあけてくれない。こんな時、へたに手を出すといやらしい医者だと思われかねない。もう少しあけてもらわないと服が汚れます、と言うと、本当に少しだけあけてくれるという具合でイライラさせられることもある。別にあなたのおへそや下着が見たいのじゃないんですけど、と口には出さないが、ここで「もう少し」を更に繰り返すべきなのか、諦めて妥協するか、しばし迷うものだ。

こういうバカバカしいやりとりは、本当に時間の無駄だが、これも検査料のうちと割り切るしかない。検査する側からすれば中途半端な所で妥協すると重大な病気を見落とす恐れもあるので、しっかり見て欲しいなら患者さんも協力すべきだと言えようが、そういうのはこちらの一方向的な論理だろうか。しかし、単に肌をさらすという問題だけではなく、どういう検査なのか予め理解していれば避けられるトラブルもある。インフォームドコンセントといえど大げさに聞こえようが、やはり検査予約の段階で簡単な説明はすべきだろう。

エコーゼリーについては温度が問題だ。たとえ短時間の検査であっても冷たいゼリーを使うなんて言語道断であり、加温器は必需品である。暖まり具合は患者さんにつける前に必ず自分につけてみて確認する。だが、このゼリーは直

ぐに冷たくなるから始末に悪い。暖かく感じるのは体につけた直後だけで、5分も検査していれば皮膚面は冷えてくる。特に冬場は危険で、超音波で風邪をひかされたというお叱りを頂戴することも皆無ではない。当然、室温にも気を配る。手際よく検査すべきだし、体を露出させる範囲を極力少なくするよう配慮する。検査後にゼリーをきれいにふき取ることも重要。暖かいおしぼりを用意している施設もあり、患者さんサービスに差が出るところでもある。

超音波検査では探触子を直接体に押しあてるので、こそばゆいとか、痛いとか、何らかの感覚は避けられない。故意にはなくとも、患者さんに不快感を与えてしまうことがある。私も探触子のあとが赤く残るほど強く押しつけられて痛い思いをした経験がある。実習のとき学生同士でもらうと、こそばゆくて思わず吹き出す学生もいる。何をどのように不快と感じるかはかなり個人差がある。彼の拒否反応もこのせいかもしれない。探触子をあてる強さや移動の仕方なども検査する人の癖もあって、最適なあて加減というのはなかなか難しいのだ。おまけに息止めに要求される。画面に集中しすぎて周りが見えなくなるようでは失格。いつまで息を止めてればいいのか、その都度きちんと指示しなければ患者さんにはわからない。私は息止めに指示する時には自分も息を止めている。こうすれば患者さんがどれくらい大変なのか予想がつくし、自ずと長すぎる息止めに指示しなくなる。

超音波検査室は暗い。別に明るい室でも出来ないわけではないが、暗くすれば照明が画面に映り込まないし、コントラストがついて病変が見やすくなる。決して女性に怪しげなことをするために暗くしているのではない。

最後に若い女性対策について。彼は、超音波検査をこの世から撲滅できないならば、女性が検査を行うべきだと主張している。確かに診察や検査で肌をさらずにも同性ならば抵抗感が少ない人も多いただろう。だが、女性が検査すれば簡単に解決する問題ではない。実際、超音波の診断技術を修得するには相当の修練期間が必要なのだが、現行制度では免許（医師、診療放射線技師、看護婦など）さえあれば誰でもよく、検査の quality は全く問われていない。女性が安心して検査を受けられるためにも、十分な修練を積んだ女性がこの分野で多く活躍されることを祈念して本稿を終えます。

(名古屋大学医学部助教授・保健学科放射線技術科学専攻)